

CISRの歩み——定礎から変貌へ

エミール・プーラ



国際宗教社会学会議(CISR)は一つ大きな冒険であり、しかも今日まで引き続いております。われわれはすでに四十年間継続させ、二十回のコンフェランス——その報告要旨は即座に出版されてきた——がその歴史に句読点をうち、そして標柱となっています。それを語り、達成された業績とその道程を思い起こすには、四十分では足りません。会議の歴史を逐一たどるには到底短すぎますが、その軌跡をスケッチするには、つまりまず草創期に次に変動期になされたことを理解するには十分であると思われまふ。

「国際宗教社会学会議」の理念はフランスで生まれ、ベルギーで成長しました。それは、ソールショワール——パリに近いドミニク派修道院(当時、そこではシュニエヤコンガールのような人が教えていた)——において、T・グレゴワール神父とルーヴァン・カトリック大学道徳哲学および自然法教授ジャック・ルクレール司教座聖堂参事会員との会話の中から生まれました。この企図はかれらの願望にかなったものでした。⁽¹⁾

グレゴワール神父は、たいして社会学者に知己があるわけでも社会学を知っているわけでもありませんでし

た。かれは社会哲学を教えていたのです。かれのかわりにルクレール教授が、主要著作はありませんが、大きな足跡を遺しました。かれは、定礎者であるだけでなく、さらに、指導者であり鼓吹者でした。一言でいえばユニークかつ有能な人物でした。われわれにとっては有名な名前ではありますが、それゆえ実体を覆い隠してもいます。

一 定礎者

ジャック・ルクレール(一八九一—一九七二)は、ブリュッセルで生まれ、自由主義的なカトリックの上流ブルジョワの家庭に育ちました。かれは「わが家の宗教は礼拝に限られ」、聖職者を警戒するものであった、家族のもの教会には行つたが、ローマ教会は無視していた、と書いています。ブリュッセル自由大学での高度な研究——自由思想をもったすべての教授たち、それからルーヴァン・カトリック大学での高度な研究、かれは両者を評価しましたが、「学校に対する深い懷疑主義」そして自ら考えるという流儀は失いませんでした。

こうして、かれはその自由な環境に育まれて世俗の文

化人になりました。かれは、人間存在それ自体の尊厳、あらゆる職業に必要な能力、および役割の区別と画定という三大理念を擁護しています。かれは、自分の聖職がもたらすカトリック的環境にはよくなじみませんでした。かれの友人たちは「かれのはっきりした個人主義」を思い起こすでしょう。かれ自身はからだの不調を訴え、隠者に自らの在り方を見いだし、隠棲にまでおよんだのです。

かれは自分を「欄外にある」、「中途半端な状態にある」と見ています。しかし、たしかに、かれの「非順応主義」は耳目を集めるものでした。ですから、エチエヌ・ド・グレエフはこの「非因習的な人間との出会い」を例外的なものだと思つたわけです。しかし、かれは「ルクレールはけつして大きな理念をもった司祭ではなかった」とつけ加えています。つまり、ルクレールは率直というよりは自由であり、最も微妙な問題であっても避けはしなかった、いうことです。厳しくまた寛容な精神をもったかれは、勇気のある厳格な人物であることがわかります。かれをとりまく青年たちとともに、かれは第二次大戦

までつづく雑誌『ラ・シテ・クレティエヌ』を一九二六年に発刊しています。しかし、一九三九年には聖セバスチアン会議⁽²⁾で非難を招きました。すなわち、「かつて理解され、中世をとおして継続していたキリスト教は終わりを、永久に滅んだ。それはもはや復活しないだろう」という主張によって。かれは、マリタンがその大著『完全なヒューマニズム』(一九三六)——「新キリスト教の世俗的・教会的問題」について書かれたもの——において多くの人々に危険にも無謀だとおもわれたことがらの先を行ってしまったのです。

ルクレールの思考は他の方向にもむかいました。一九三八年には、大学で社会学研究会の開設を宣言しました。「自然法を前進させるためには、⁽³⁾社会的事実の実証的研究を發展させなくてはならない……。これまで、ルーヴァンで社会学の研究をしたものはだれもいなかった。社会学が何なのかさえ知られていなかったのだ。」もっと正確にいえば、社会学はおそらく忘れられていたけれども、知られてはいたでしょう。その社会学とはデュルケムに敵対するものでした。かれに對抗してシモン・ドブ

ロアージュ司祭が一九一一年に『道徳と社会学との対立』を出版しています。すぐに「多くの人々が予感していた必要性」が明瞭になりましたが、他の人々には悪評でした。

実際、この必要性が非難している領域がどこか見ておく必要があります。E・ド・グレエフの二十年後の学生であるルシアン・ギサル——かれはアソンプション修道会士での中に『十字架』の編集長になりました——はこの教育が与ええたショックを語っています。「当時、教会は存在しなかった。ただ聖教会だけがあつた。僧侶である私たちは教会についてなにも知らなかった。私たちのまなざしは小教区より遠くにはおよばなかった。」しかし、環境は閉塞的でもまどろんでもいませんでした。学生友達のあいだでは、「世界がつくりなおされ、社会的カトリシズムが望まれ、保守主義者が非難され、教会がわれわれの熱狂によって建築された。……一つのことばが私を行進曲のように昂揚させた。それはモデルヌ(近代的・現代的)という言葉である……。」しかしながら、問題は他のところにあつたのです。すなわち、「私は、

二 定礎

早くから人びとに厳しく非難されてきた哲学と神学の教育をうけるなかで、いつか一連の習慣を身につけた……。身につけるべきもうひとつの習慣があつた。それは複雑性であり、厳格な学問であつた。⁽⁴⁾

ルーヴァン大学の多くの人々にとって、この領域での複雑性の研究者であり教師であつたのは、ルクレールでした。フランスでの、ベルギーでの、社会学の隆盛は第二次世界大戦とアメリカ帝国の発見に引き続くものです。ルクレールのおかげで、「ルーヴァン大学は一九四五年に社会学教育の計画に関してヨーロッパで最も進んだプログラムをもつことができた。⁽⁵⁾」この教育の成果が、一九四八年の『社会学入門』(二七二頁)でした。これはポルトガル語、スペイン語およびイタリア語に翻訳されています。

本書は合衆国では何の評価も受けていませんが、その成功はルクレール教授を有名にし、「ヨーロッパ、ラテンおよびカトリックの」読者にとって必然的であることを示したのです。

この長い前置きはCISRの前史にとって脇道ではありません。もし、あいまいな、また相入れない回想という電波障害からのがれようとするなら、欠かすことのできない鍵となります。実際、はじめに起こったことを把握するのは大胆な仕事です。私たちは、信憑性や確実性の程度に差はあっても証拠にこと欠きませんが、証拠文書を年代順に完全にならべることはできません。証拠文書には欠落があり、また散逸もしています。カレル・ドベラーレ、リリアヌ・ヴォアイエ、そして私自身は遺されたものの発見と収集に最善をつくしました。主として、ベルギーでの草創期の、ルクレール、ド・ビエ、オイヨワ、そしてウタールのいくつかの資料です。私はこのヘルシンキのコンフェランスにおいて、求められるべき資料保存の努力について、また適当な場所への収集物の集中について、そしてこうした参考資料によって可能となる歴史的研究について、ひとつの解答を示唆します。

一九三八年、J・ルクレールは一人の人物すぎません

でした。十年後、かれは、ひとつの社会的事実として、状況はまさに変わった。しかも二重に変わったのだと確認することができました。一方では、人間、調査、出版、プロジェクト、そして様々なセンターが問題となり、他方では、宗教社会学が問題になっていました。それは当時いわれていた社会・宗教的あるいは社会・教会的研究であり、その題材は無媒介的活動と個人の行為の究極的目的に關してでした。あらゆる条件が最初の機会のために併せられました。すなわち、一九四八年四月二日と三日にルーヴァン大学の高等哲学研究所——メルシエ枢機卿によって定礎——のサロンで行われた会議です。

どんな関係でだれが招待されたのか、今日では知られていません。かわりについていえば、ルクレールはベルギー、グレゴワールはフランス、ド・ヴォルデはオランダ代表でした。四月の会議の署名のない二ページにわたる記録と、日付はないがJ・ルクレールの署名のある一ページの設立宣言しか残っていません。回顧しますに、それは設立の会議、第一回のコンフェランスと見なされるでしょう。そこには十六人が集まり（そのうち女性は一

たのはこの時だけでした。

グレゴワール神父はフランス人と接触をとる仕事をしていました。われわれの目からすれば、いつも、なぜかしら進捗しませんでした。はじめ、パリ大学法学部の教会法制史およびキリスト教制度史教授のガブリエル・ブラは「フランスの諸宗教におけるカトリシズムの位置の歴史的説明」という観点から、一九三一年から国内調査を行い、『フランスにおける宗教慣行史入門』（一九四二—一九四五）という二巻本を出版しました。そのとき、みんなはかれのことを「宗教社会学の科学的啓蒙家」と思いました。⁽⁶⁾

ル・ブラの欠席は厄介な問題を起しました。一九六〇年一月、C I S Rの紀要『リエゾン』において、新会長ジャン・ラバンスは「われわれの定礎者であり、今なお指導者でもある人たち、すなわち司教座聖堂参事会員ルクレール氏とG・ル・ブラ氏」に祝福をおくっています。おなじ日付で、C I S Rの規約の草案の第四条につきのような記述があります。「当初の会員は下記に示された定礎者である。すなわち、司教座聖堂参事会員ルク

人で、ルーヴァン大学の社会学者クレール・ルプレです。彼女は誕生したばかりの組織の第一書記になりました」、十人はベルギー人、四人はフランス人、二人はオランダ人です。ほとんどが大学教育に、三人は社会学研究に従事していました。聖職者と俗人（三分の二と三分の一）から成っていましたが、神学者はだれもいませんでした。半分がルーヴァン大学から、リエージュ大学からは教授が一人。二人のオランダ人は非常に活動的な、のちには槍玉に上がった人物で、ハレのK A S K I（カトリック社会・教会研究所）を代表してきていました。かれらは「いわば偶然に、会のおわる数分前に到着し」、そのために大変いそがしく働きましたが、「かれらのいなかったところで成されたことには大きな関心をもつて」いないという印象をのこしました（J・ルクレールから、K A S K I所長ケンラート宛下宛、一九五一年五月十四日）。フランス人はパリ大学のカトリック学部から、そして特にリールとソールショワールの経済および人文学部から来ました。いく人か——二人に一人——は真の関心からというよりは友人のよしみで招待に応じています。かれらがC I S Rに来

レル氏、ガブリエル・ル・ブラ氏である。」決定稿ではこの部分は削除されました。それは、規約的に必要ないという見解によってなのか、あるいは歴史的な真実に對する配慮からなのでしょう。簡潔化のためか、あるいは訂正のためでしょうか。いまだに、ル・ブラはおよそ三十年來その地位を占め、またC I S Rの二人の共同定礎者の一人としても見なされています。したがって、C I S Rは一九四八年に創設されましたが、一九五一年の第三回コンフェランスにおいてはじめて真の意味で基礎付けられた（その後の中断はない）のであって、このとき報告要旨がはじめて出版され——先に述べましたようになぜかはわかりません——最初の規約も採択されたと、こう言わなければならないのでしょうか。むしろ、歴史の作り替え、つまりそれに立ちあわなかったものの想像的な起源ではないのでしょうか。J・ルクレール自身はそれを知っていました。かれは一九五一年五月十四日にK A S K Iの所長ケンラート氏に宛てて、次のように書いています。

フランスにおける宗教社会学をつくりあげたすべ

ての人びとはル・ブラを自分たちの先生だと思っています。われわれがわれわれのCISRに思いをいたすとき、だれもがル・ブラの存在の不可欠性を評価しました。私は、とてもよくル・ブラのことを知っております。かれをルーヴァンに迎え入れましたし、またかれは私をバリに迎え入れたのですから……。このことはル・ブラについて言われ、また書かれることでもあります。私だけでなく、他の人びとも関与したことです。かれは、書かれても、答えません。かれはそのことについて言われても、関心と共感を示して、われわれの成功を願うのですが、会議への招待には応じません。つまり、かれはわれわれへの協力を望まず、その動機も明らかにしないのです。

ルクレールはフランスでの連続コンフェランスでかれに会うことを強く期待しています(たとえば、ずっと後で、かれのブレダでの出席について云々する人びとに反論して)。この定礎者はこの「先生」(ル・ブラ)の遠慮を、そしてとりわけ同様に世俗化された大学でのかれの微妙な地

位からくる控えめな態度を説明するのです。

フランスの著名な人で欠席したのは、ドミニコ会のルブレ神父、かれは経済学部と文学部の定礎者であり、その協力者の一人として認められています。それから司教座聖堂参事会員ブーラル、かれは一九四七年にフランス農村における宗教慣行地図を初めて出版しました。それから、フランススコ会士モット神父、かれは国内布教司教センター(CPMI)の定礎者です。最後に、イヴァン・ダニエル僧院長、かれは『フランス、布教の国?』等の共著者です。

最初の記念すべき日は、教育の現状についての情報交換と、研究方法についての討論と、そして「非キリスト教化」というテーマについての考察で終わりました。翌日は、午前中G・H・L・ツエーゲルスのKASKIについての報告とルーヴァンのIRES(経済・社会研究所)の見学によって占められました。午後もしばらく行われました。そして、次の十点の決議が出されました。第一はCISRを誕生させること、第二以下は、その目的、対象、入会の条件、活動、および組織の設定です。

二、本機関の目的は宗教社会学研究に専心する人びとの交流を確立することである。

三、本機関は最も広い意味での宗教問題に関わるいっさいの事象の認識をめざす。その際、効果的な活動という観点から、実証的認識の方法をとくに重視することとする。

四、本団体は宗教団体ではない。科学に基づいた宗教社会学に関心を持つあらゆる人びとに開放されている。

五、本団体は実証的な社会研究に従事する人びとのみを会員とする。入会は各国委員会によって、初年度は同国の少なくとも二人以上の同意によってなされる。

六、コンフェランスは一年に一回、本団体で指名された諸国において召集される(……)。

七、会員は自国の通貨で会費を払わねばならない……。

基本的に、ここには善意と強い人格という確固たる思想があります。そのかわり、集合的な意思と共通の構想

が欠如していました。この団体は出発しなければなりませんでしたが、最初の諸条件のなかで、宗教社会学の現状、組織の無からの出発ということ、そして人間関係と情報交換の貧困があらわになってしまいました。創設の憲章は決議権および決議規定について何も言っていません。第五および十条は死語のままですし、第四条は支配的な感情に押し切られています。

この第四条は、しかし、明快で、躊躇も曖昧さありません。世俗の文化人、職業的な僧侶、そしてカトリックの環境での社会学教育の先駆者等は司教的な著述と実証的な認識との本質的な相違を認めます。実証的な認識は社会学的な諸方法を宗教現象に適用します。たとえば、この領域に実証的認識はないのではないかと迷ったとしてもです。第四条はいかなる神学的もしくは司教的な口実なしに、科学的に価値のあるあらゆる人びとに開かれた非宗派的機関の創設を専門家たちに示しています。それは、学術団体(アカデミー)ではありません。実践的なねらいが理論的な関心に勝りますが、方法的な要請につよいアクセントをおいています。そのうえ、その仕

事と同じくメンバーからいっても本来きわめてカトリック的ではありますが、この新しい機関はすべての人びとに開かれていると言われています。そして、すべての人びとに対して、「最もひろい意味での」対象の宗教的特定と研究者の社会学的能力以外に他の条件はありません。J・ルクレールはそのことについて、第三回のコンフェランス（ブレダ）の後、KASKIの所長にあてた一九五一年五月十四日付の手紙で、自分の考えを説明しました。

教授たちがとりわけ方法への強い関心をもっていたということに驚く必要はありません……。この関心は、それゆえ、研究を刺激するよりは、それによって真剣さを確信させてくれるものなのです……。まさに方法が問題となったのは、宗教現象の実証的認識にとって、その領域において興味深い他の諸宗教の個性と出会う面白さがあつたからですし、また、いわば教会的構造に組み込まれた組織を構成する大きなメリットも見いだせないからです。

この意味で、Opafiaでのコンフェランス（一九七二）

宗派的でなかったということを、念を押しておきます。キリスト教的組合も同様です。もともと、教会の助言は受けていました。フランスではCFTC（フランス・キリスト教労働者同盟）の「非宗派化」は、規約におけるキリスト教という名称とそれへの準拠という最後の文字に関わっていました⁽¹⁾。

J・ルクレールは、自己評価からはまったく離れて、同意と激励を当て込んで、一九四九年の議論において進んでローマ教皇の権能を活性化することに執着しました。かれは「一般に望まれているような社会学的科学の準則に基づき、その方法を用いてなされる、宗教を題材とした社会研究」に対する警戒を受け入れています。かれにとっては正当化された。しかし余計な次のような見方があります。「社会学が云々されるときは、デュルケムのことが考えられてきた。」CISRはそれを別様に理解していましたが、誰がそれを知り得たでしょう。「われわれのやっているような研究の精神は非常に新しいので、まだ一般に周知のものになることは期待できなかった。」デュルケミアンたちが反カトリックだったの

は原点への回帰であると同時に当初のプログラムの達成でもありました（後論）。しかし、そこに到達するのに二十年の歳月と、多くの経験、議論が必要でした。われわれはやがてその理由がわかります。しかし、まったく明白に、今日われわれのものとなっている精神をJ・ルクレールに帰すのは時代錯誤というものです。非宗派的（non confessionnel）というのは、かれにとつてとわれわれにとつてとは、同じ意味ではありませんし、同じ深さも持っていない。これは驚きです。しかし、非宗派的ということは最も多くのメンバーの存在を危うくします。かれらはカトリシズムのただ中にありながら、その宗派性についての関係資料を、その恐るべき穿鑿を、その穿鑿のやりきれないほどの深さを、そしてその終わりのなき持続（すでに二世紀以上にわたる）を無視しているからです。

私はその危険を冒すつもりはありません。私はただカトリックの、あるいはキリスト教に基づいたさまざまな政党——ドイツでは中央党からCDU（キリスト教民主同盟）——CSU（キリスト教社会同盟）まで——が決して

で、当然、カトリックは反デュルケムでした。「社会学派」が社会学のすべてではないとしても（それは一つの派でしかなかったのですから）、この派は、方法的にうまく正当化されえない諸原理をもった社会学よりはましでした。

CISRは宗教的事実の実証的研究にカトリック的原理を応用するために、その原理と社会学的方法とを結びつけようとしています。それについては、全く教会の權威の外で科学者の間で自由に討論されます。もつと正確に言えば、「宗教生活について云々されるとき問題となるのは、われわれ自身のことであり、メラネシアやホッテントットのことはないので。」これは、ルクレールが未開人の社会学に反対して、いわば内的自律の制度を問題とするものとして現代人の社会学とよんだものの意味です。CISRは、それゆえ、その独自性の意識をもつて、ふたつの戦線に自らを位置づけています。その関心は、宗教現象のあらゆる形態をあつかう一般社会学もしくは比較的社会学ではなく、所属共同体によって境界を画された社会学なのです。他方から言えば、教会の位階が教育することをもって本分とするなら、社会学者は

観察することをもって本分とするということです。各人には万人に有益な、そして他の者の侵害にならない、各人の仕事があるのです。

この定礎者の態度における自由な、つまりローマ教会の精神にとつて疎遠な、教育的配慮の結果に、どうして触れずにいられましょうか。この教育的配慮はかれに固有のものでしたし、かれは自分の孤立をひしひしと感じました。多くの資料がかれのことを生き生きと見せています。

少なくとも、CISRの歴史的資料には、次の一九四九年のノートを完全なままで添付する必要があります。

国際宗教社会学会議

宗教社会学は、社会学のあらゆる部門のなかでおそらく最も党派的情念のなかに息づいてきたものである。それは、宗教の誤謬の証拠をそこに発見するという幻想をもって研究されてきたし、またしばしば、宗教現象の実証的研究よりも哲学的なテーゼ

で頭が一杯の人びとの手のうちにある武器になった。

あるときから、宗教生活の社会的条件に関する方法的研究がなしうる貢献が教会において気づかれるようになった。方々で宗教統計の部局が組織されている。司教区はその管区の正確な状況を知ることにより多大の関心をもった。熱心な僧侶は、かれが勤めている地域の宗教生活の状況について、非キリスト教化の原因について、そして布教の方法について、調査を行った。

こうした努力はそのほとんどがバラバラに行われ、また非常にしばしば科学的厳密性を欠いたものであった。

一九四八年、ルーヴァンに集まったフランス、オランダ、およびベルギーの社会学者のグループが国際宗教社会学会議の設立を決議した。それはこの種の研究に関心のある人びとを結集することを目的としていた。一九四九年、かれらは他の国の研究者のさらなる結集を期待した。

かれらは、社会的宗教的研究の発展が聖教会に著しい貢献をもたらすという印象を、また、このジャンルの研究がいたるところで必要だと思われることから熱心な人びとを集めるのは困難ではないという印象をもった。他方で、かれらはまた、聖教会が自らカトリック的生活の発展につながる諸事実の、科学的に制御された観察を怠みきらっていないということ、それどころか真実がもつあらゆる寄与を喜んで受け入れるということを示すことで、今日の世界における自己の威信を増すのだと考えたのである。

カトリック教徒は、共通の教皇に集中されたひとつの位階秩序によって、完全な世界のうちに結合されるという不平等な特権を享受している。国際宗教社会学会議の諸努力は教皇庁によるアプロバシオン（その存在の承認と活動の許可）に貴重な激励を見いだしている。

さらに、かれらは、各段階をうまく切り抜ける必要性を理解して、国際的な宗教社会学センターの創

設が、教会の高い威信を確保することによって、この研究の発展に対して重要な影響力を行使することになると考えた。その際、このセンターは専門家を育て、あらゆる国のカトリック的社会学を指導し、国際的な結合をも組織するものと考えられたのである。しかし、その理念を提出するのがかれらにふさわしいとしても、そのイニシアティブを執ることはかれらにふさわしくない。

司教座聖堂参事会員

ジャック・ルクレール

ルーヴァン大学教授

J・ルクレールは、規約どおり、明白で鮮明な認識論的立場を認めさせました。しかし、社会的、政治的には、事態は、つぎの三つの理由から急速に紛糾しようとした。①理論と実践とのあいだに距離があり、参加者がきちんと同調しておらず、そしてかれらの教会への同化がかれらの実践に重くのしかかっているという理由。②カトリック的社会学者／社会学的カトリック教徒が無宗

派的科学という理想を支配していること。③カトリックの位階秩序——教皇およびローマ教皇庁から司教管区の司教まで——がこの自律の主張を、つまりカトリックによって作られながらそのコントロールと指令を免れたカトリシズムの社会学というのを理解せず、それに対して同意(ベネディクション)を要求し礼拝を捧げているという。——こうしたことも、カトリックの位階秩序が、社会学とは何かということを問うことなしに、社会学という言葉を理解することは不可能なですから当然ではないでしようか。

実際、抵抗——少なくとも保守的な——は、社会学的精神に対するものとその宗教への侵入に対するものでした。抵抗は結局は、曖昧な名称にとらわれることなく、どんなもの(その対象や着想)とも明示せずにただ宗教的とされる社会学を目指して、まっすぐに進みました。したがって、ここで、理由のない論争や、あつても後から付けたような論争を考えるのはよしでしょう。

CISRは一九七一年にバイリンガルになり、フランス語が通用するようになりました。フランス語では問題

なく「sociologie religieuse (宗教社会学)」と言います。ちようど、sociologie rurale (農村社会学)とか sociologie industrielle (産業社会学)とか sociologie économique (経済社会学)あるいは sociologie coloniale (植民地社会学)のように。それはまた基本的に『社会学年報』の諸セクションの標題と同じです。それよりいくらか早くに、カトリック神学の学部にとって代わった、ソルボンヌの高等研究所のエコール・プラティックに Sciences religieuses (宗教諸科学)というセクションの標記があります。世俗の大学人G・ル・ブラは、M・モースとC・ブーグレの公的な支えをえて、一挙にこの伝統の一員になりました。かれの地位とそれへの専心はすぐに、この支えをバックに、構成的にはっきり区別される二つの発展の流れを支援しました。すなわち、一つは四〇年代以降、ルブレ、ブーラールおよびルクレールのような聖職者の周辺に姿を現してくるもの。もう一つは十年以上後に、フランスの世俗的伝統のなかで、「諸宗教の社会学集団」[Groupe de Sociologie des Religions] (一九五四年に設立)と Archives de Sociologie des Religions (NO.1は

一九五六年一月—六月号)の周辺に現れて来るものです。

この二つの流れには、狙いの違いと水準の違いがあります。狙いについていえば、ル・ブラは、明確に評価的であるかどうかという点で、司教の社会学と科学的社会学とを対照化させました。⁽¹⁰⁾水準については、かれは社会学と社会誌——これはときには「憲兵の帳簿」と同一視されます——とのあいだに区別を設けました。

この分岐した進化はそれ自体避けられないものではありません。三人の内、ルクレールはこれを拒否し、ルブレは無視し、ブーラールは前提とした、ということができましよう。事実、CISRは二つのやり方でそれに挑戦しました。その確固たる宗派的再方向づけと、もうひとつは、ジョバンニ・ホイヨワが一九五五年五月に嘆いた、その狭い経験的限定によつてです。G・ル・ブラによつて開かれた道と「今日の試行」——これはしばしば「把握しやすい要素の統計的利用のなかに」とじこめられたままになってしましますが——とを比較して、かれはつぎのように結論づけています。「宗教社会学は、国勢調査員と統計学者の単純な操作に還元されることによ

つて、大きな損害を被った。この課題は、すでに気の抜けないものとなっているが、実は、まさに突破すべき唯一のものとなっているのだ。ここを出発点として、(宗教という)人間の事実の原因の巨大な領域に目を向けることが重要なのである。⁽¹¹⁾

したがって、二つの「宗教社会学」が存在したわけだ。ひとつは『社会学年報』のデュルケムの伝統のそれ、もうひとつはカトリック印のものです。そして、この名称のもとに、一九五五年から五六年かけて二人の学者によつて同名の『宗教社会学研究』が出版されたのです。G・ル・ブラはそれぞれに対して貢献しました。このとき、言語的状況は、この題名とともに、以後、一九五四年に諸宗教の社会学集団 [Groupe de Sociologie des Religions] (C.N.R.S.) の庇護のもとに、少し変わりました。選ばれた言葉は、カトリック周辺に対してと同様、デュルケムの遺産に対しても意図された距離をはっきりさせました。宗教的領域の総体への明確な関心は、宗教への入信のいっさいの条件を払いのけたのです。

人は手のうちにあるやり方で何とかやっていくものだ

と言います。完璧な言語など夢でしかありません。人はいかに言うことで、論争している相手に対して自分を位置づけます。「諸宗教の社会学 *sociologie des religions*」は「宗教社会学 *sociologie religieuse*」によって二度占められた領域の地位奪回をしましたが、それ自体はあまり価値がありませんし、いずれの場合を考えても、固定観念に囚われない「宗教の社会学 *sociologie de la religion*」でいいでしょう。このように、各言語にはそれぞれの表記があります。英語ではなぜ、*sociology of religion* と言った、*history of religions* と言ったのでしょうか。ところで関係性についてみると、一九五四年に誕生した GSR (諸宗教の社会学集団) の地位の取得は、一九四八年以降の CISR の発展によって理解されます。後の解釈はすべてこの理由について答えています。つまり、前には何もないと。

一九四九年四月二十八日から三十日にかけての、新しいルヴァンでの第二回のコンフェランスについていえば、われわれは七つの報告の謄写版刷りのレジュメをもっていますが、そのほかは資料は少ししかありません。

的なある精神を認めるのは全く避けることのできないことであるが。」

参加者の数は、記録がいろいろで迷います。——「十カ国を代表した約八十人の出席者」——そして登録されたリストでは、七カ国から来た四十九人の聖職者と十七人の俗人——つまり六十六人——、二人以上の報告者の欠席(イギリスとコロンビア)。諸報告は、研究あるいは統計の状況(フランス、ドイツ、カナダ、イタリア、イギリス)と調査結果とに分かれましたが、もっと野心的な報告も二つありました。それは、C・J・ヌース(ワシントン・カトリック大学)の「教区の社会学」とFr・ウタール(ルヴァン大学)の「社会構造と宗教区」です。議論は、職業として語る社会学者と、解決を要求する司祭の間において困難であることが明らかになりました。一方は現状を考え、他方は未来を考えるのですから。長くかかる問題です。

ある報告は大きな問題の中心を衝きました。それはド・ヴォルデ(ルヴァンカトリック大学)の「制度」に関わる報告、じつは宗教社会学の規定です。つまり、そ

およそ二十五人の参加者と、中心となる一つの問題——どうやってあらかじめ決められた目標に到達するのでしようか——、代表諸国の一つにおける隔年のコンフェランスの決定、KAS K I およびその所長 G・H・L・ツエーゲルスの熱意で決まった、オランダで一九五一年に持たれる会合くらいなどです。

三 新しい方向づけ

すでに見ましたように、第三回のコンフェランスが一九五一年三月二十九日から三十一日にかけてブレダにおいて行われましたが、その意義を過小評価することは困難です。第一回に対して、この第三回目のコンフェランスは真にインターナショナルな規模をもっていました。また、第一回に比べてそのテーマは特定されていました。つまり、それは「宗教生活および教会生活の領域における実証的社会諸科学の状態。その、種々の国における司教及び布教活動への応用」です。招待状は有色人種にも出されました。「意図は厳密に科学的なコンフェランスをもつことである。もつとも、その作業において非科学

れは神学的な学問 (Paul H. Furley, N. Monzel, Ad. Geck) なのか、あるいは対象が宗教生活の社会的諸様式に限定された実証科学 (M. De Volder, G.H.L. Zeegers) なのか、観察可能なあらゆる現象にまで広げられた対象をもつ実証科学 (G.L. Bras) なのか、ということでした。問題になるのは二つの点です。ひとつは社会学研究の自律性であり、もうひとつはその領域に対する自己限定性とその好奇心に対する自己検閲性です。そして、カトリシズムの社会学は研究者の個人的誠実さによって照らし出され、カトリック教会への助力のために作られるようになったのです。

こうした点から、すべての人びとが同じ結論を引き出すことはできませんでした。ルクレール司教座聖堂参事会員にとって、誠実さは人格に関わることであり、研究は能力の問題であり、効用は教会の判断に属することでした。つまり、かれは「さまざまな宗教を研究する調査者の隣接的な協力」を希望し、「カトリック教会へ関心を限定すること」を拒否することをもって、このコンフェランスを終えました。KAS K I の所長ケンラート氏は、

宗派的——デノミネーション的——性格をCISRに与えることで、反対にこの三つの側面をつなげようとした。

ルクレールはただちに反応しました。かれは、さきに引用したケンラートへの書簡において、CISRよりもむしろKASKIの精神と関心において組織されたブレダでのコンフェランスが問題解決をした往時を思い出させています。つまり、会員が、「教会において一つの役割をはたすことを望んでいるカトリックの立場を一挙に取得し」た、オランダの研究所の活動の最初の公的表明のことです。ルクレールは少し後でそれを了解しましたが、「変えるには遅すぎる」と、またCISRの状況ではどの程度可能だったかわからない、と認めています。聴衆の大半は専門家以外で構成されており、かれらは——いささかしいかげんに——より能率的にという観点から決められた一般委員会を選びました。

この一般委員会に、決定が委ねられました。委員会は一九五一年五月二十四日、基本憲章の代わりをする規約を採択しましたが、あまりにも尊重されないの、第二

条を次のように修正しました。「本団体の目的は、宗教社会学研究に専心するカトリック教徒の交流を確立することにある。それにより、最も広い意味での宗教問題の社会的諸側面に関わるすべてを理解し、とりわけ実証的認識の方法に力点をおくものとする。」その際宗派的ということが明示されたのではなく、非宗派的というのが非明示的だったわけです。ですから開かれたアソシエーションは閉じられた、つまりカトリックだけのクラブになったのです。特徴的なのは次のことです。コンフェランスは、オランダの司教団を代表するブレダの司教によって開放されていたのですが、実はラ・エーの教皇の代理使節の名譽会長職、司教座聖堂参事会員ルクレールの会長職、そして地域の司教の総代理の副会長職の下に位置づけられていたということです。慣習がのさばっていたのです。

ルクレールはそのことに驚きませんでした。方法に専心する科学者は結果を顧慮する使徒（布教者）によって再び結びつけられ、布教者は科学者を衝き動かすからです。これ以上あたりまえのことはありません。「カトリ

ック教会において布教者は多く、しかも力をもっている。かれらは教会を支配しているとさえ言う。なぜなら、教会は人間を救うために作られたのであって、研究を促進するために作られたのではないのだから。われわれは、さらなる研究のために、宗教社会学の社会学を要請するひとつの社会現象に直面していることに気付くのだ：⁽¹³⁾。しかし、かれは自分の理念を守りました。それは、かれが「ベルギーにおける宗教生活の社会的側面の科学的研究に専念する人びとを糾合するために」（第一条）、一九五一年に「ベルギー宗教社会学センター」をつくったとき再び日の目をみました。フランスでこれに相当するものは「カトリック宗教社会学センター」で、ここではカトリシズムの研究に限られており、プロテスタントイズムのプロテスタント・センターの創設が待たれてい

ます。

G・H・L・ツエーゲルスの提案に基づいて、報告要旨は『宗教教育国際雑誌』*Lumen Vitae* [命の光]（ブリュッセル）(1951, 1-2, 390p.)の合併号にまとめられました。本誌は一九四六年以来出版され、この意味で多くの貢献

をしていますし、またそこで、G・ル・ブラは一九四八年一月に国際的な調査「宗教生活に対する環境の影響」を始めました。ともかく、ツエーゲルスはルクレールの見解を支持しつつ、この号の紹介と、そこでの「フランスにおけるカトリシズムの社会学」への言及を受け入れました。

四 組織の拡大

一九五三年十月三日から五日にかけて、リヨン（ローヌ県）の近郊ラルブルスルで行われた第四回のコンフェランス（フランスで最初のコンフェランス）を受け入れたのは、一九四一年にドミニコ修道会士ルイ・ジョゼフ・ルブレ神父によって作られた「経済とヒューマニズム」でした。ドミニコ修道会士フランソワ・マレーに頼まれて、準備は組織的に行われました。予想された報告者たちは詳細な指示を受け入れました。時間表は討論に多くの時間を割いていました。出版されたレジュメは討論の経過をたどり、その参加者は討論の意義に感銘していました。同時に行われた会議があったり、また三つの委員

会から選択しなければならぬ日もありました。

出席者は九カ国から五十三人で、そのうち初めて出席したのはスペインとオーストリアです。各国はその宗教社会学の現状を報告しました。フランスは、ジャン・ラバンが宗教社会学の神学受容とさらには注目とを再確認し、社会学者たちが一般に「宗教の本質そのものを看破する」という信念を断念していることを強調しました。

そして、プロテスタンティズムおよび非キリスト教的諸宗教の社会学に地平を広げました。「あらゆる宗教を対象として協力する遠大な努力のうちにしか、真の宗教社会学はない。」これが論争の中核であり核心であります。

トゥレットでは、社会学者が、率直に言って、際立っていました。かれらはブレダでなされた転回をふたたび問題にせず——CISRの宗派性——、この組織の規約が社会学の当然要請してしかるべきものを含んでいないこと、また宗教社会学があらゆる宗派性を免れていることについて、多くを考察しています。教会の位階組織はこの論争には無関心で、結果のみを待ち、それが留保され自らがそれを評価することを望んでいるのです。ピウ

宗教の実践から引き出される対象に対する深い知識をも前提としている。モット神父（かれは司教になるでしょう）は侵食をおそれこう言っています。「結局、指揮を執るのは神学者でも社会学者でもなく司祭である。畜群（信者）が身を委ねるのは司祭なのだから。」オランダのカメル派修道士ロジェ神父は経験から、知識人と聖職者が都市の民衆宗教をほとんど理解しようとしないと観察しています。ルブレ神父は、大学的な中立性をそなえた「諸宗教の社会学」と「カトリシズムの内部に適用される宗教社会学」とを注意深く区別しています。後者は、その「分析枠組が必然的にかれらの超越的信仰に依存しており」、またその観察が「自らの信仰の光を抽象化することのできない」そんなカトリック信者によって実践されているのです。

問題は要するに、鎖の両端をおさえること——実証的で、教会にとって有用かつ有効な実証科学を利用することです。そして、各人は自分の現在の状況にすることが可能になるのです。このように、G・ル・ブラの二分割（二四頁参照）は説明されています。一九五一年に、か

ス十二世（一九五八年没）がミラノで、納得できる結果を司教が慎重に利用すべきだと主張すれば、ボローニャの大司教であるレルカロー枢機卿は「社会学は統計学と同じく統治の一手段である」と主張するでしょう。ドイツの宗教統計学のカトリック・センター所長であるフランツ・グローナー博士は、第一の地位が与えられるべき神学とは別に、「総体としての科学的なカトリック神学」が「ある程度まで」、厳密に経験的な宗教社会学と科学的に正確な宗教統計学とを統合できるのが望ましいと思っています。

第二部「方法と問題」の五人の報告者の間で一致があったかどうかは一概には言えません。それは、神学（J・ルクレール）、司教学 [Pastorale]（J・F・モット）、教会法学（G・ル・ブラ）、宗教心理学（I・ロジェ）、人間経済学（L・J・ルブレ）との関係で論じられました。ルクレールの立場はつぎの三つの側面をもっています。①宗教全体に適用される宗教社会学はカトリック教会のみに固有のものではない。②その発展は「最大限の自律性」を要請する。③それは、その対象、とりわけ研究される

これはブレダでの討論に出席して、それにはなくむしろ自分の経験に依拠して、つぎのように言っています。「それゆえ、信者と同様無神論者によっても深められ、また非宗教と同様宗教のためにもなりうる科学がある」が、それはつねに「相互理解を促進し」、「それを深めるあらゆる意見をもった研究者の懇懇な競争心」を好むものであると。一九五三年、かれはトゥレットで追認された『国際カトリック社会学会議』の「宗派的・司教的性格」を、そして進歩しつつある現状を強調しています（p.9 et 15）。しかし、同時にかれはそこから結論を引き出すことは拒否しています。急いでくださいと、リヨンの大司教ジェルリエ枢機卿は、出席した社会学者たちに要請しました。つまり、教会は急いでおり、司祭は待てないと。しかし、問題は研究の時間であり、教会の時間ではありません。G・ル・ブラはかれに答えました。おそらく、二千年には……、と。

ルーヴァン・カトリック大学では三度目の第五回のコンフェランスが、一九五六年八月三十一日から九月二日にかけて、マリーヌの大司教ファン・ルイ枢機卿の賛助

のもとで行われました。どんなテーマも掲げられませんでした。分冊で出版された報告要旨 (Casteman, 1998) は中心的な二つのテーマに分かれています。「宗教社会学の使命 (Vocation)」、使命の社会学」(二四一頁)と「都市の教区と農村の教区」(二二三頁)です。出席者は五十三人から百九十人に、二十三カ国に跳ね上がりました(そのうち九カ国はルーヴァン大学の学生が代表している)。大多数はベルギー(五十五人)とフランス(五十人)です。はじめて、イギリス国教徒W・ピカリング師の報告がありました。J・ルクレールは引退を発表しました。「本会は大きくなりました。わたしは年をとりました。」トウレット以来の事務局長ジャン・ラバンは留任をまねがれ、フランソワ・ウタールが事務局長になりました。

CISRは一九五八年のブリュッセル万国博覧会を利用して、五月八・九日にローマ教皇庁のパビリオンにおいて「教区のプランニングと教会の構築」というテーマ⁽¹⁷⁾で特別コンフェランスを組織しました。これは強烈な関心と興味深い研究を巻き起こしました。つぎはパリで、同じ年の十二月二十六・三十一日に行われました。そこ

九五二年にカトリック宗教社会学センターが生まれ、G・ル・ブラ、F・イザンベル、そしてJ・メートル⁽¹⁸⁾が、所長を引き継いでいます。諸大学はそれらに対して、司教的パースペクティヴのうちにある教会的なものおよび宗教的なものによって一般的に方向づけられた一連の仕事⁽¹⁹⁾を支持しています。はじめに、ルブレ神父が「経済とヒューマニズム」の中心にあり、つぎにIRFEDの中心に、モット神父は国内伝導の司教センターとともにあり、ブーラー司教座聖堂参事会員は宗教慣行の司教区調査の全国網(の中心)です。イタリアでは、定期的な会合が始まっています(ビサ, 1997; ボロニア, 1999)。スペインは状況が困難です。ロジェルロ・ドウオカステッラがバルセロナで一九五七年にISPA(応用司教社会学研究所)を定礎しましたが、宗教社会学に公的に門戸を開放するためには一九六六年まで待たねばなりません。スイスにはスイス宗教社会学者協会(ASOREL)ができるでしょう。

方々での研究所や社会—宗教研究センターの出現はそれらの協力という問題を提起しました。発議は、オラン

では、ラテンアメリカの国々の社会・経済的發展の結果、カトリック教会に課された根本問題に対して、その学生たちをどう組織するかがもっぱら論じられました。三回目は、宗教社会学の方法について、一九五九年末オランダでの開催が予定されましたが、行われなかったようでした。

実際、宗教社会学はあちこちで大きく拡大しました。

一九五一年五月二十一日、J・ルクレールは事務局を設置し、それから(一九五二年)ベルギー宗教社会学センターを「ベルギーにおける宗教生活の社会的諸側面の科学的研究に専心する人びとを糾合するために」創設しました。センターは断固として非宗派的です。定礎者は、インターナショナルな規模では獲得できなかったものをそこに作ったのです。すぐに二十六人の加入を数えました。ブリュッセルでは、一九五五年にF・ウタールとJ・レミが社会—宗教研究センター(一九六四年にルーヴァンに移転)を創設しました。その名称は、「ベルギー司教団への技術的貢献」という宗派的結びつきに特定化されることなく、固有の対象をよく示しています。フランスでは、一

ダ・ドイツ・オーストリアに支所を増やしたKASKEIの所長G・H・L・ツエーゲルスからなされました。かれは、それらの支所と加入した二つのセンター(ブリュッセル大学のとJ・ラバンによって動かされているリヨン大学のカトリック学部社会学研究所)とともに、一九五六年ジュネーヴにICARES(国際カトリック社会—教会研究所)を作りました。かれはまた三つの国際会議を組織しました(移民労働者についての、一九五五年のブレダでの、一九五七年のアッシジでの会議、そして、鉱夫「鉄」および炭鉱夫についての一九五七年のルクセンブルクでの会議)。一九五八年一月一日、かれの辞任は社会および社会—宗教カトリック研究所国際連盟(FERES)の模様替えをもたらしました。その本拠地はフリブール(スイス)に、つぎに一九七〇年にはルーヴァンに移り、どこよりもヨーロッパとラテンアメリカに容易に拡大しました⁽¹⁹⁾。

第一の仲間——カトリック——の外にも、示威運動は広がりました。まず、六つのヨーロッパ・プロテスタントイイズム社会学研究会があげられます。すなわち、ストラスブール(一九五九)、ユトレヒト近郊の Woud

schoten (一九六〇)、ベルリン (一九六一)、チューリッヒ (一九六二)、ラグビー (一九六三)、スウェーデンの Siguna です。つぎに、現代ヨーロッパにおけるユダヤ人の生活についての二つの国際研究会 (ブリュッセル、一九六二年と一九六五年)。東ヨーロッパにおける宗教社会学の二つの国際研究会 (イエナ、一九六五年およびブラハ、一九六六年) 等々……。

国際社会学会 (ISA) によってまる三年かかって組織された世界的会議について、特別に語らなければなりません。第三回 (アムステルダム、一九五六) において、ル・ブラ会長のもとで、ある非公式の会合が、アンリ・デロッシュとノルマン・ビルンバウムの発議によって、はじめてありました。そこには、宗教現象の社会学的研究に関心をもったあらゆる国々の七十人の社会学者が集まりました。大部分はまだ知り合いではありませんでした。

この会合は第四回 (Stresa、一九五九) に一新され、ISA の助力によって諸宗教の社会学研究委員会の誕生にこぎつけました。それには、会長のジョルジュ・フリードマンと事務局長のビエール・ド・ビーの支持がありました。

ラによって定礎されました。ル・ブラは自分達を「五本の指」に譬えましたが、N・ビルンバウムが六人目となりました。宗派的な接触もなく、国家組織からも独立しているこのグループは、宗教的な信念を考慮しない有能な研究者すべてに開かれ、完全な自由検討の立場であらゆる宗教現象に注意をはらい、かつ科学的共同体と直結することを望んでいます。『諸宗教の社会学雑誌』(Annales de sociologie des religions) は、一九五六年以後、この精神を表明する公的な場を提供しています。「偉大な古典」には喜んで関わりましたが、どれにも忠誠は誓いませんでした。

そのころ、カトリック的宗教社会学は地盤をかため、後継者なきデュルケム学派にとって代わろうとしていました。生まれたばかりの GSR は、デュルケム学派の前では軽い存在でしたが、両者の間の距離は大きく、両立不可能性は明白でした。たとえ、個人的には両方に所属しても——たとえば、G・ル・ブラ、J・メートルそして、とりわけ F・イザンベールです——問題はなかったとしてもです。このとき、G・ル・ブラはこの立場を、

た。委員長に選出された N・ビルンバウムは一九六一年三月オックスフォードで宗教社会学国際会議を招集することができました。第五回 (ワシントン、一九六二) には、委員会は「宗教と発展」について研究し、九十人ちかい社会学者を糾合したワシントン・ジョージタウン大学で三日間世界会議を延長させました (宗教社会学についての ISA 以後の協議)。ある不安がすでにキャンパスで感じられました。満場一致で、学生の宗教についての国際的な調査の計画が決定され、つぎに大筋の構想が練られました。当てにされた融資は続きませんでした。が、はずみ (elan) がつけられました。多くはばらばらの研究でした。⁽²⁰⁾

この時点で、一つの亡霊すなわち GSR (Le Groupe de Sociologie des Religions) にこれ以上ふれずにおくことは不可能です。その活動は ISA の中で方法的に示されました。このグループは一九四五年十月にパリにおいて、ジョルジュ・ギュルヴィッチの社会学研究センター (C NRS) の一環として、G・ル・ブラを中心に H・デロッシュ、F・イザンベール、J・メートルおよび E・プー

「科学的社会学と司教的社会学」と区別することによって、理論化したのです。⁽²¹⁾ さらに一九六七年十一月二十八日には、F・ウタールが当時の事務局長 E・パンに宛て書いています。そこには、組織が拡大するのではないかというときでさえ、うまく説明できないある不満が現れています。「司教座聖堂参事会員フェアショイレによれば、重要なのはとりわけ内部問題です。というのは、かれらは宗派的問題に対してどのような構えをとるべきか、あまりにも無知だからです。」事実、この点について GSR はまるで躊躇も、不一致も、変貌も意識しませんでした。GSR はその科学的生産の、外部による評価にまったく身を任せていたのです。⁽²²⁾

五 躊躇

この組織拡大は、宗教社会学がなお苦しんでいる不十分さを減らすことにはなりません。第一は、ロジェ・メールが第四回ヨーロッパ・プロテストантиズム社会学研究会 (チューリッヒ、一九六二年四月二十五日) を開いて認めたように、その受容が十分でないことに基づいていま

す。かれは言っています、「ローマ教会、教区および信者は、宗教社会学と教会社会学の研究が發展するのを不安なしにまた懷疑なしには見ていません。これらの社会学は、プロテスタンティズムの内部での市民権をまだ獲得していないのです……。おなじことはカトリシズムにとつてもなお相当します……」⁽²³⁾第二は内部のことです。それはその対象に帰因し、またそれは、J・フェアショイレがFERESの会合において一九六九年にズバリと認めたような性質に関わっています。すなわち、「教会の全テーマはしばしば、非常に多様な社会的事実です。しかし、われわれは十年たつても、萌芽的なものですら、宗教の社会学的理論を引き出すに至らなかったのです。」それ以来、CISRは一九七一年の変貌まで続く不安定、不一致、動揺を示すことになります。

第六回のコンフェランスは、一九五九年九月三日から六日までボローニアにおいて、教区の統合的役割についての報告を自らおこなったレルカロ枢機卿の賛助のもとで開催されました。テーマは「宗教と社会統合」です。参加者の水準を上げるために、資格についての要求をだ

ラバン会長は開会の辞においてそれを明確にしました。

「われわれのコンフェランスが宗派的性格をもっているとするなら、すべてがそれを指示しています。われわれが他の宗派の研究者を歓迎するのを全く拒否しないとすれば、私はこの集まりで挨拶することを幸甚に思う次第です。それはまた、われわれがカトリックだけのための社会学を確立させようとしているのでないからであり、いやむしろ宗教社会学が教会において一つの、おそらく控えめな地位を、しかし聖化された諸科学のうちでやはり一つの地位を占めるよう要請されているからであります。」かれが追求したように、キリスト教徒たちをCISRに引き付けるのは、経済生活や政治生活を研究する場合のような宗教生活に対する単なる科学的関心ではなく、かれらの信仰と教会の期待なのです。「なぜなら、宗教社会学はある神学的立場をとり、神学に基礎づけられ、神学に必要とされているからです。また、われわれのコンフェランスが教会のなかで發展することで、宗派的性格をもったからなのです。しかし、われわれの研究が社会学から全く離れて進化できなかったことは言うま

しましたが、学生を締め出さないように配慮しました。二十一の国から百二十八名の参加者がありました。そのうち二十六人はイタリア、二十四人はベルギー、十八人はフランス……。目を引く著名人の欠席者は、J・ルクレール、G・ル・ブラ、F・ブーラール、L・J・ルブレ、J・ラバンです。六人の司祭——そのうち四人はジェズイット——に委ねられた主要な七つのレポート、これらはすべてアメリカの大学で行われている社会学のスタイルでした。最初は、プロテスタント系の大学のF・G・ドレフュス（ストラスブール大学）が「フランスにおけるプロテスタンティズムの社会学の使命と限界」について——全体会議外で——報告しました。報告要旨は『ソーシャル・コンパス』（XIII, 1966, no. 1-2-3）にのせられ、出版されました。二つの決定がなされました。ひとつは、本会の会員と有料会員、選挙人と被選挙人だけからなる結社の結成。もう一つは、二年ごとの謄写版による、基本的に情報提供的な『連絡誌』の発行です。⁽²⁴⁾

ボローニアでは、多くのことが語られました。議論の中心は、CISRの宗派的性格についてでした。ジャン・

でもありません。どんな場合でも、カトリック社会学者は、宗教の領域を扱うときでさえ、専門的な社会学者を気どることはできません。その思考過程の厳格さ、その諸概念の正確さは共同の批判を呼び起こし、あらゆる人びとによって認知され得るものでなければなりません。⁽²⁵⁾

J・ラバンの挨拶は、満場一致のものにはなりませんでしたが、ブレダでの方向転換以来、CISRにおいて一般的かつ支配的なある感情を表現していました。実際、かれは二つの問題を結びつけたのです。それは、コンフェランスの宗派的性格と次にくる認識論的立場の問題です。定礎者J・ルクレールは本来あらゆる宗派性からも独立した立場を共有していました。他の人びとはそこに、本来還俗的な社会学に対する独立の要請と保証を見えています。ボローニアでは二重所属——CISRとGSR——でのぞんだジャック・メートルは反対の立場にたち、つぎのように論争の根底を述べています。「われわれはつねに同じ問題にぶつかっています。宗教生活の内容を研究することが問題なのですから、研究の方法は、社会学理論の代わりになる神学の確立によって認識論的

に統一されることになるのです。⁽²⁶⁾

ボローニアでなされた実践的決定を実行に移すために会長と事務局長は一九六〇年のはじめに新しい規約を作りあげ、「教皇庁と接触をとる前に」CISRの会員に委ねています。教皇庁のたくさんの方の厳しい反応の出てきえに動きはありませんでしたが、理念は輝いています。非常に曖昧で永遠に誤解されるようなものでしたが、宗派のかどうかは別にして、カトリックによって形成され、宗教生活の研究にさざげられたCISRは、その計画を教皇庁とコンフェランス開催地の司教に通知することをつねに念頭においています。国際的な組織が問題なので、教皇庁はそれを認知の要求と解釈し、まだ熟していないとの判断から拒否しました。このいきさつについての資料はあまりありません。もし発見されても、おそらく誤解以外に何も見いだされないでしょう。CISRはカトリックの当局によく見られることを重要視しています。が、一般にはどんな場合でも、こうした監督庇護には反対だという理由で、重視されないでしょう。

しかしながら、ボローニアでのCISRの宗派性への

強力な要請に対して、一九六〇年の規約は、宗派性を確立し「最も広い意味での宗教社会学を促進する」(第一条)ということを目的として提示することに、控えめにかつ一種あいまいに満足していた一九五一年の規約を無視しています。

この規約は一九六一年、モントリオールでのコンフェランスの後、バルセロナ以来の事務局長でローマ・グレゴリオ大学教授のエミール・パン神父の肝いりで四度目の修正がなされました。CISRは開かれていましたが、もし言い得るなら、それは保護された相互宗派性という様式においてです。CISRは「宗教の進歩に関心をもちつた社会科学の専門家たちの」(第二条a)出合いの場になりました。その執行委員会は「少なくとも二人のローマ・カトリック教徒と二人の他のキリスト教教会のメンバー」を含み、全員でそれぞれ九人と十三人からなっていました(第八および九条)。結局、任命委員会(執行委員会の出席メンバーの意のままになる)は各コンフェランスにおいて単純多数で事務局と執行委員会の欠員を補充したのです。

第七回コンフェランスはドイツ連邦のケーニッヒシュ

タインで六月三十日から七月二日まで、「教会への所属。心理学および社会学的諸側面」というテーマで開催されました。⁽²⁷⁾登録は二十三カ国から百八十八人、そのうち三十八人がベルギー人です。司教団によるいかなる後援も要請されませんでした。K・ドベラーレは、聖職者と修道士がたくさんいたという思い出をもっていました。J・フェアショイレの覚書は、さまざまな理由から「拡大する不安」を書き留めています。あまりに能力のないものが議論を独占し、そのうえ、かれらの見解に反駁するよりは釈明を得るために議論がなされました。つまり、執行委員会は「諸手段が完全な排除のためにとられることを要求している」のです。しかし、なかでもブーラール司教座聖堂参事会員に率いられたある小さなグループは、非カトリック教徒の入会に抗議し、原点に忠実なもう一つのコンフェランスを作るぞと脅迫さえする始末です。原点という神話はここでは友情を壊す原因になったのです。

一九六五年七月二日から四日まで、バルセロナで第八

回のコンフェランスが、サラマンカ司教大学区事務総長の後援のもと、ニューマン・センター(ロンドン)理事でCISRの新会長の英国人A・E・W・スペンサーによって開催されました。初めて、討議が公式に言語別に組織されました。出席者が減少しました。十八カ国から百五十三人が来ましたが、そのうちスペイン人は五十二人でした。テーマは「前技術社会から産業的都市的社会への移行期における宗教」。報告要旨は例外的に出版されませんでした(『ソーシャル・コンパス』がそのうちの四つの論文を掲載することになる)が、会議の雰囲気は暖かく、思想交換の喜びがありました。それは必然的なものでした。⁽²⁸⁾

つぎに、唯一初めて、CISRはヨーロッパを離れた。第九回コンフェランスは、まさに、モントリオールで一九六七年八月一日から四日まで開催されました。しかも、それは万国博覧会に引き寄せられるかたちで、アメリカ・カトリック社会学会の後援のもとで行われたのです。このコンフェランスは「聖職者の危機」が夥しい文献を生んでいる時代の、「教会と社会における聖職

者」というテーマに関心を絞りました。アメリカ人の出席はヨーロッパ人の欠席を埋め合わせませんでした。百二十四人の登録があり（全員出席したわけではない）、二十カ国から二百五十人の参加がありました⁽²⁹⁾。また、初めて、CISRの事務局のおかげで、報告要旨がコンフェランスのまゝに準備されましたが、英語が主流で、十九の報告のうち十五が英語でした。二つの理論研究がコンフェランスの関心を奪いました。ウェーバーとバーソンズです。アングリカンとプロテスタントの試みは広く受け入れられましたが、カトリックの主導権を犯すことはありません。サビーノ・アクアヴィータが会長に選出されています。

第十回コンフェランスは一九六九年八月十八日から二十二日までローマで開催され、強調すべき退潮にもかかわらず、目をみはる進歩の兆候を多く示しました。十四カ国から百五人が出席し、そのうちイタリア人は六十二人⁽³⁰⁾でした。会費を払ったのは七十二人だけでした（したがって、この人たちに選挙および被選挙資格があります）。テーマは「宗教心の類型、次元および程度」。はじめて、プ

の外にいます。ですから、事務局長は四倍の仕事を持つことになりました。すなわち、増大するCISR離れの修復、新規約の起草、つぎのコンフェランスの準備、そしてCISRの科学者聴衆の拡大です。

仕事は長くかかり困難でした。かれは、名簿カードの整理から始め、同時にH・デロシュ、GSR（当時はE・プーラが指導者）およびISA（N・ビルンバウムとハンス・モル）とコンタクトをとりました。つぎの三つの問題が関連しあっていました。①CISRは実際に、間宗教的な綱領ともつばら科学的な綱領とのあいだの選択をするのか。②後者を仮定した場合、つぎのコンフェランスがこの選択を承認することが本当に確かなのか。③さらに、もし、この選択が確定したら、ISAの中に諸宗教の社会学の下部委員会が存在し機能している一方で、CISRの自主独立路線はどのように正当化されるのか。

つぎのコンフェランスに東欧の国を選択したことは、こうした不確定性を増大させました。すなわち、科学的討論の代わりにキリスト教徒とマルクス主義者のやり合いになる危険を冒しはしないか、ということでした。この

ログラムが「セクト」（B・ウィルソン）、無神論および無宗教に開放されました。教会的パースペクティヴが非常にはつきりと残っていますが、しかし、教義的もしくは司教的考察を犠牲にして、社会学的文化と技術的用具への明らかな配慮が見えます。バーガーとルックマンによる教会社会学批判への言及がありました。方向づけの変更を求める欲求が確立しました。司教座聖堂参事会員ジャック・フェアショイレ（リール大学）は、一九七〇年一月一日以来他の候補者なしで事務局長に選出されていますが、かれは新しい「非宗派的」もしくは「世俗的」な規約を用意すべく、一九四八年以来五度目の委任を受けました。同時に、総会は、つぎのコンフェランスをユーゴスラヴィアで開催したい旨を表明しました。

六 変 貌

新事務局長は、当初からの四十四カ国、三百六十六名の名簿カードを引き継ぎましたが、会費を払うのは五分の一しかいません。宗教現象を研究している社会学者のリストは長いのですが、しばしば断固として、CISR

危険は、事務局長が奇妙な駆引きをやればやるだけ、想像だけのものですまくなるのでした。フランスでは不可欠な財政的援助のために外務大臣（カイ・ドルセ）を呼び、ユーゴスラヴィアでは、教会側の教皇大使とザグレブの大司教ばかりでなく、国家側の「諸宗教および無神論研究所」も関わってきました。

しかし、最終的にはすべてが調整されました。J・フェアショイレは、多くの参加者——科学的・財政的——と必要な保証——大学——、および、こうした状況では評価しうる祝福（ベネディクション）——教会——を得ました。対立はありませんでした。すべての人が、政治参加をしない科学的な場に歩調を合わせようとしなかった社会主義国において宗教を語る満足、を見いだしたようでした。この多くの国々の間での議論（政治的・社会学的・教会的）のみがこの結果を可能にしたのです。⁽³¹⁾「世界的な水準で表明された関心は重要です。最も多様な哲学的、科学および宗教的傾向は既得のものです。コンフェランスは今や宗教社会学界においてひとつのイベントでありうるのです」と事務局長は十一月に予告しました。⁽³²⁾

一九七一年の最初の数カ月は、新規約の構想づくりに振り替えられました。J・フェアショイレと私自身との間で多くのやりとりがあり、⁽³³⁾そのあと普通の方法で採択の手續きが取られました。こうして、次に掲げる第三条になったのです。すなわち、「CISRは科学的性格の団体である。本団体は、宗教現象あるいはそれに関係する諸現象の分析、解釈および体系化に関わる社会学および諸科学の進歩に貢献することを目的とする。」一九七八年の二つの宗派的な条項は（満場一致で）姿を消しました。ひとつの強力な運動が、「宗教社会学」から「諸宗教の社会学」への——フランス語でいえば *sociologie religieuse* から *sociologie des religions* への——呼称の修正と移行を掲げて展開されました。しかし、それは段階を追って活動の場を失い、うまく行かなくなりました。J・フェアショイレは「私は、この問題は時代遅れだと思ふ」と意見を述べ、諸宗教でもって宗教現象なるものを汲み尽くしえないと、付け加えています。⁽³⁴⁾規約は全体として、八十三人中七十八票の賛成で承認されました（反対二、欠席三）。ISAの下部委員会の二人の代表が

CISRの執行委員会の座に自動的につきました。これは相互的なものです。

ここでひとつの補説が必要となります。つまり、CISRの規約上の「世俗化」は社会学的な世俗化についての議論とどのような関係にあるのかということですが、ヘルシンキで開かれた第二十回のコンフェランスはひとつのテーマ・セッションをこの議論のために充てねばなりませんでした。オリヴィエ・チャネン（ローザンヌ大学）はそこで、CISRの報告要旨の分析知見について報告をしました。つまり、一九七一年以前には、すなわち *Opatija* のコンフェランス以前には重要なことは何も無い、と彼女にはおもわれました。そして、ルックマンも——「世界的なコンセンサス」にもかかわらず——、この議論も、長期にわたる内部的なCISRの進化に対して重大な影響は与えなかった、と彼女は結論しました。この結論を、それらの議論を先取りせずに受け入れましょう。しかし、地平を広げましょう。CISRはつねに不十分さに悩んでいます、孤立にはあまり悩んでいません。その規約とは別に、『諸宗教の社会学雑誌』*Ann.*

hies de Sociologie des Religions のバックナンバーを詳しく見て行く必要があるでしょう。

第一号から、「脱神話化」に対するブルトマン的な反駁の社会学へのP・L・バーガーの関心が指摘できます（一九五五）。第八号は、ハワード・ベッカーの出版された著作に注目しています（一九五七）。それに関しては、世俗化について議論されたBoseyのエキュメニック・センターのコローク（一九五九）を参照してください。第十七号では、J・セギーがT・ルックマンの仮綴の「論争」『近代社会における宗教の問題』（一九六三）を批評して、つぎのように述べています。「世俗化はわれわれの領域の多くの専門家の関心を再びあつめると信じられている。」第二十三号は、諸宗教の社会学下部委員会の一環として第六回世界社会学委員会（エヴィアン、一九六六）において提示された世俗化についての四つのレポートを指摘し、そのうちの二つを翻訳しています。すなわち、P・バーガーとT・ルックマンの「世俗化と多元主義」およびイヴァン・ヴァルガの「ハンガリーの若者における世俗化」です……。

幸いなことに、GSRとCISRとの間に若干の連絡がありました。こうして、一九六二年、ケーニッヒシュタインにおいて、執行委員会の役をつとめてきた二十三人の専門家グループ（二十八人は教会関係者、五人は世俗から）が、つぎのコンフェランスのテーマに関心をもちました。「一般的な意見は、最終的にはF・イザンベールによって提案されたテーマ、すなわち近代社会における世俗化の過程、に収斂した。」こうして、構造の問題に中心をおいた視点から、西洋と同様第三世界にも関わり、かつその積極的側面がちゃんと引き出さねばならない、文明の諸価値の進化に、関心が移って行きました。メンバーを巻き込んだ協議が、バルセロナでのコンフェランスのテーマの標題になりました。

理念は一九六九年にローマでとりあげられました。つまり、「世俗化の概念を強調せずに、宗教集団の構造におよぼす世俗化の効果」が研究されたのです。ユーゴスラヴィアの社会学者は、同様のテーマについての経験的もしくは理論的などんな研究も提出するだけの力がないと自己評価しています。「都市的産業的社会における宗

教と宗教心、無神論と無信仰」というぎつしりつまった
標題で一致がえられました。この標題は、地域的組織が
たよりにしている二つの研究所——カトリックのと国家
の——を暗に指向しています。

こうして、第十一回のコンフェランス——「脱皮」の
コンフェランス——は Opajia (ユーゴのイストラ半島)
で一九七一年九月二十日から二十三日の日程で開催され
ました。参加者は二十三カ国から二百十一人で、そのう
ちユーゴスラヴィア人は七八名でした。いつものように、
大部分はフランス人、イタリア人そしてベルギー人とし
た。東欧からは五人のポーランド人、ハンガリー人一人、
ソヴィエトはいません。三人のアフリカ人、ラテンアメ
リカからは一人のブラジル人。H・デロッシュがそれに
ついて熱心な論評をしました⁽³⁵⁾。かれは科学の世界主義
〔領域の多元性に方法の多元性が適合した〕、実験的学科
〔それは「誹謗か絶賛かで、宣伝か予言かで洗われた性向」を
避けた〕、そして最後に社会性の可能性〔半ダースの言語、
半ダースの交差した良き論争〕を強調しました。かれは、
二つの「国際的なもの」が、諸宗教の社会科学の国際的

的な問題を科学に想起させるものと答えるでしょう。そ
れは方法においても、また同様に理論においても汲みつ
くされないものです。われわれはここにおいて、一九七
一年の変貌——私はそれに個人的に貢献しました——は
必然的で幸運でかつ決定的な進歩を示していると判断し
ます。しかしながら、いまだに、G・ル・ブラの弟子ポー
ル・ウイニンガー司教座聖堂参事会員(ストラスブール)
がいます。

かれは長口舌をふるって、CISRをカトリックの定
礎者たちの精神から遠ざけ、「まったく混乱した実証主
義における客観性という覆のもとで」⁽³⁶⁾その精神を失わせ
た、CISRの歴史を嘆いています。この診断への答え
は未来にあるのであり、過去にはありません。

最後に、この回顧からえられる大きな教訓は、社会学
者であろうとときでさえ歴史的客観性のうちに息づ
いている打ち勝ちがたい困難さということと同様、われ
われを条件づけている「社会学の重み」ということでは
ないのでしょうか。環境の、想像的なものの、そして
確信の力です。科学者はその領域においては、いかなる

な大結社へと統一することを、世界社会学会(モントリ
オール、一九七四年)の後、漠然と予見していました。

この点では、未来はこのユートピアを承認しませんでした。
その代わり、ラ・エーで行われた一九七三年の第
十二回コンフェランスは、Opajiaの継承と変貌を確固
たるものになりました。四年間で、CISRはその参加者
を五倍にしました。つまり、会費会員が七十二人から五
十四カ国三百二十九人になったのです。頂点には、一九
七七年(第一四回コンフェランス、ストラスブール)に、三
十六カ国三百二十六人の参加者——そのうち二百四十五
人は外部者——をもって達しました。一九七九年(第十
五回コンフェランス、ヴェネチア)は三百十人の参加で、
そのうち二百三十九人は外部者でした。

定礎から変貌まで、長い道程の粗筋をやっとたどりま
した。おそらく、多くの人は、自分たちの知らなかった
その起源と、それがもたらした障害とに驚くでしょう。
かれらは、その継続的進歩のゆえに以前の状態が無効に
される科学に対して、科学史がどんな関心を示すものな
のか、わからないのです。私としては、これこそ、基本

恩寵も特権もあるいは免除も受けないのです。

(CISR第二十回コンフェランス、ヘルシンキ・一九八七年)

註

- (1) 私は個人的にはルクレール猥下に面識はない。私はこ
こではかれの『自伝資料』[Documents autobiographi-
ques]、すなわち四つのテキストとかれの死後J・ラド
リエールとC・コラールによって出版された著作目録
(Tournai-Paris, Casternan, 一九七二) およびオー
ジュ『ジャック・ルクレール、その人間と仕事および友
人達』[Jacques Leclercq, L'homme, son oeuvre et ses
amis] (前掲出版社、一九六一)——以前は *La Revue
Nouvelle* (ブリュッセル) の五〇周年号 (一九五四年一
二月)——のみに依拠して論じる。最良の文献としては、
ギスラン・モランの『ジャック・ルクレール、道徳進化
の証人』[Jacques Leclercq, témoin de l'évolution de la
morale] (Genboux, Duculot, 一九七二)。
- (2) スペイン系バスク地方において、キリスト教民主主義
者の肝煎りで開かれる、年に一回の会合。
- (3) 「ベルギー法が付与する」名称を擁護しつつ、「この
名の下に社会学が教えられる」(Doc. autobio, p.133)
- (4) L. Guissard, *Histoire d'une migration* (Paris, Descle de
Brouwer, 1979)
- (5) Pierre DE BIE, dans *JL, l'homme*, p.14. フランスで

は当時、大学の社会学の講座は三つしかなかった。そして、文学士の枠では「道徳および社会学」の免状しかなかった。そのことが刺激となって、ジョルジュ・ギユルヴィッチはC.N.R.S.の専門研究所である社会学研究センターを創設した（一九四五）。同センターはフランスにおける社会学の有数の温床となり、そこで一九五四年にG.S.R.が構成された。

(6) ベルギー・カトリック普及運動組織総裁でC.I.S.R.のメンバーでもあるジョバンニ・ホイヨワの覚書（一九五五年五月）。G・ル・ブラはより控えめでニュアンスに富んでいたが、カトリック的環境のなかに入るとほとと一息ついたものだった。

(7) 再分割の問題は現在カトリック大学の定義と性格にかかっている。

(8) かれはそれを意識していた。「私は今自分の仕事の最後にさしかかっています。若いころからの見解をいまだに持っています。この見解は大部分のカトリック教徒のものとは異なります。もし教会がその在り方を私の見解にあわせるなら、事態は大きく変わるでしょう……。私は、自分の考え方が教会の進化の線に沿っていると思うが、しかし今日の教会の状態の先を行っていると認めます。私はおそらく一世紀か二世紀早く生まれたのです。でもそれはその反対よりは良いでしょう。Doc. autobiogr., pp.64-65. Texte daté du 30 déc. 1958) の弁明は一九五六年八月三十一日の第五回コンフェランス（ルーヴァン）開会の辞からの引用である。

ン）開会の辞からの引用である。

(9) これは、いまだに解決のつかない二つの科学の大問題である。すなわち、「反キリスト教的科学」とそれを忌避する「カトリック科学」である。（私はこの問題に最近「自由・世俗性」[Liberté, laïcité] (Paris, Cujas-Cerf, 1988, 一章から一章) において取り組んだ。）

(10) *Archives de Sociologie des Religions*, 1959, no.8, pp.5-14.

(11) ホイヨワによる。

(12) 同じような国際的な議論は一九八一年に教会の歴史をめぐって、カンボ・サント・トゥウトニコ（ローマ）で行われた。つまり、神学的学科はありうるかというもの（*Römische Quartalschrift*, 1985, 1-4, pp.1-258）。

(13) 第五回コンフェランス（ルーヴァン、一九五六）での開会の辞。

(14) C.I.S.R. *Sociologie religieuse, science sociale. Actes du IVe Congrès international*. Paris, Les Éditions ouvrières. Économie et Humanisme, 1955, 270 p.

(15) 前掲 *Actes* (報告要旨) の引用 (pp.266-268)。

(16) かれの調査を参照。I. Rozier, *Ilz zocht Gods afwezigheid. Psychologische peilingen inzake religieuze toestanden in Europa*, La Haye, 1956 et 1957, 2 vols., 364 et 468 p. (France, Espagne, Italie, Autriche)

(17) 彼の論考は *La Revue nouvelle* (Bruxelle), décembre 1958 に発表された (pp.481-527)。

(18) C.I.S.R.をモデルとして、それは一九七一年に宗派性を脱し、フランス宗教社会学会という新しい名称を取らざるをえなくなった。

(19) 一九六〇年から六一年の間、ヨーロッパに十一、ラテン・アメリカに七、カナダに一（ラヴァール大学）、アフリカに二、アジアに一（インド）支所ができた。メキシコでは、イヴァン・イリイチのC.I.D.O.C. (Cuernavaca 国際資料センター) が、一九六八年と七一年の間に *Sondeos* という総タイトルのもとで八〇点を超える「ラテン・アメリカにおける宗教現象研究双書」を出版した。そこでは宗教社会学が大半を占め、ロジェ・バステイドが *Archives de Sciences Sociales des Religions*, 35, 1973, pp.139-150 における二つの双書を紹介した。

(20) *Archives de Sciences Sociales des Religions* は周到にさまざまな会合に携わり（第八、九、一〇、一一、一二、一四、一五、一六、二一、二三号等を見よ）、多くの報告要旨を掲載した。ストラスブール（第八、九号）、オックスフォード（第二二号）、ワシントン（第一五—一六号）、エヴィアン（第二三号）など。

(21) 実際、ここでの問題は、国際的な科学協会としてのC.I.S.R.の認知を得るためにバン神父がユネスコに対して運動したこと——F・ウタールには知られていなかった——である。G.S.R.は、C.I.S.R.が諸宗教の社会学における科学的共同体を代表する資格がないと、評価した。

その代わり、G・ル・ブラがどんな遠慮もない融合を奨励したのは事実である。たとえば、F・ブーラールの「宗教社会学への第一歩」[*Premiers Itinéraires en sociologie religieuse*] (一九五四) への序におおづつきのように述べている。「カトリックがその研究を自ら禁じる諸部門がある。それは黙示である。というのは、もし大昔の人びとの神話が部族や氏族の発明であるとするなら、キリスト教の玄義は神から人間への口述（……）であるからな。」

(22) *ASR*, 8, juillet-déc. 1959, pp.5-14.

(23) *ASR*, 14, juillet-déc. 1962, p.7.

(24) 一九五三年から発行されているK.A.S.K.I. (ラ・エー) の季刊紀要 *Social Kompas* は、一九六〇年 *Social Kompas* という新しいタイトルのもと、社会および社会・宗教研究所国際連盟 (F.E.R.E.S.) の定期刊行物となり、フランソワ・ウタールとジャン・レミの指導の下で、ブリュッセル社会・宗教研究センター（後にルーヴァン社会・宗教研究センター）から出版された。本誌は一九八九年の第三六巻から、ルーヴァン・ラヌーヴに編集部のあるサージュ社から出版されるようになった。そのとき、C.I.S.R.は「一九(25) "Le rôle de la C.I.S.R.", dans *Social Kompas*, 1960, 1, pp.69-74.

(26) 第六回C.I.S.R.の報告 *Archives de Sociologie des Religions*, 9, janvier-juin 1960, pp.73-80 所収。方法——の場合、機能的分析。

(27) このテーマはカナダ・ジェズイットでローマ・グレゴリウス大学教授のエルヴェ・キヤリエ神父の学位論文『宗教的所属の心理-社会学』(Rome, 1960) によって示唆されたようである。

(28) 私は *Rivista di sociologia*, mai-novt 1965, pp.169-188 の Vincenzo Filippone による J. コンフェランスの批評に注目した。おもしろい点に、J・フェアショイレは C.I.S.R. の沿革 (1948-1967) と名簿のうちにさまざまな意味を読み取っている。

(29) 沿革と名簿 (二六二人、そのうち三十九人はカナダ人) における新しい隔たり。

(30) 沿革は一九六七年に到達した。名簿だけがモントリオールとローマとの比較を可能にしている。つまり、下降はもう感じられないということである。

(31) K・ドベラーレはそれについて調査した (一九七〇年八月十一日の事務局長への手紙)。事務局長は「外部にとどまることは全く不可能」と返事した (一九七〇年九月十日の手紙)。

(32) C.I.S.R. *Bulletin de liaison*, 1970, no.2, p.3.

(33) 「われわれはこの数カ月の間、新規約を作り上げるためにともに時間を過ごしました。しかし、私は、カトリックの位階組織からのすべての代表をきっぱりと排除します」とフェアショイレは一九七九年十二月十六日に私に書いてよこした。これは一九六〇年来の挫折の道程の暗示であった。

(34) 諸宗教の社会学—三十九票、宗教社会学—三十六票、棄権—八票。三分の二の多数が必要だった。

(35) *ASR*, 32, juillet-déc. 1971, pp.3-8.

(36) Dans J.M.AUBERT, R.METZ et al., *Le Droit et les Institutions de l'Eglise catholique latine de la fin du XVIIIe siècle* 1978. *Eglise et Sociétés*. Paris, Cujas, 1984, pp.450-51. (Histoire du Droit et des Institutions de l'Eglise en Occident, t. XVIII, collection fondée par G.Le Bras).

(フランス社会科学高等研究院教授)
訳・梅沢 精 (うめざわ せい・新潟産業大学専任講師)